

令和7年度 小平市立第六小学校 学校評価報告書

学校教育目標

①元気でしようぶな子 ②よく考えてやりぬく子 ③仲よくできる子＜重点目標＞ ④進んで働く子

目指す学校像(ビジョン)

【目指す学校像】 みんなの笑顔が輝く学校
 【目指す児童・生徒像】 「わかった」「できた」「がんばった」「ほめられた」ときなど、他者とのかかわりを通して笑顔が輝く児童 明るいあいさつで笑顔が輝く児童
 【目指す教員像】 ワークライフバランスを実現し、笑顔で児童の前に立つ教員 仲間と協働して、自己を伸ばそうと学び続ける教員 新たな教育課題に前向きに挑戦する教員

前年度までの学校経営上の成果と課題

教科担任制推進校として、児童が教科の特性を味わうことができる学習活動を導入することができた。また、学年副担任制によって情報を共有し、指導につながったことで、安心、安全な学校生活につながることができた。教科担任制の利点を児童、保護者、教職員がさらに味わうことができるようにすることが、本年度の課題となる。

	具体的方策	第1回評価		指標に基づく成果・課題・対策	第2回評価		学校関係者評価	指標に基づく成果・課題・次年度以降の対策	
		取組指標	成果指標		取組指標	成果指標			
学習指導	ロイノートやデジタル教科書、デジタルドリルを日常的に活用した授業を行う。	2	4	夏季休業中に研修を行い、ロイノートの普及を行った。全体的に、1学期よりも利用度は増えているので、今後も新機能のお知らせなどを行い、ICT化を進めていく。校内の機器の整備なども定期的に行い、適切な使用が保たれるよう、確認していく。	4	4	児童が主体的に学ぶことは重要であるが、児童の姿勢や取組をどのように評価していくかは難しい点であり、引き続き課題である。単元を通じた自己調整や試行錯誤の過程は高学年では見取りやすいが、低学年では発達段階にあわせた見取り方の工夫及び教職員の共通理解が必要である。	学習者用端末を個別最適な学び、協働的な学びに活用することについては、学年の系統性や実施教科の偏りの観点から改善する。また、学習者用端末を合理的な配慮や児童の学びやすさの向上に活用していく。	
	OJT研修や校内研究を定期的実施する。また、校外で実施する授業研修に計画的に参加する。	4	4	既に研修に取り組んでいる教員や、今後研修に取り組む予定のある教員が大半である。今後は、校外で実施する授業研修について定期的に周知するとともに、研修に参加しやすい環境づくりとして補教体制の充実を図る。	4	4		各教員が自身の資質・能力の向上に向けて必要とする研修を受ける必要性や得た学びを他の教員に還元し人材育成を図る取組の重要性から、校外の研修(Off-JT)及び還元研修の充実を図る。	
	地域人材や地域環境を活用した体験的な学習を実施する。	2	4	地域教育コーディネーターの方々や連携を図り、教育活動の中で、様々な体験的活動を取り入れることができていく。さらに地域人材の活用を推進していくために、PTAのボランティア制度の活用を検討していきたい。	4	4		地域の人材や環境を活用した体験的な学習を系統性、学習効果の観点から見直し、カリキュラムの改善を図る。	
健全育成	学年副担任制を実施する。	4	4	給食や掃除、行事など多くの学校生活の場面で、複数の目で児童を手厚く見守ったり、対応したりすることができている。今後とも、学年担任・副担任の連携を深め、児童の指導・支援に対応していきたい。	4	4		「人に聞く」「人と関わる」姿勢を重視し、先生や友達との対話を大切にしている教育活動が肝要であるとの指摘があった。	複数の教員が学年児童に関わることで、生活指導上の諸課題への対応がより組織的に行えることから、学年副担任制と高学年教科担任制を継続するとともに、中学年に可能な範囲で教科担任制を拡充する。
	各学年で障がい理解教育を実施する。特別支援教育の指導法の共有と推進を図る。	4	4	障害理解教育を引き続き進めていく。来年度に向けて年間指導計画にも反映させる。6年間を通して、ひまわりの教員・小平特別支援学校・小金井特別支援学校の授業を受けられるよう計画を立てる。	4	4		自己調整力を育てる視点として、低学年では2～3の選択肢から自分で選ぶところから始めるなどよい。発達段階に応じて段階的に実施していく配慮が必要である。	障害理解教育と特別支援教室啓発活動を混同した計画となっていることから、整理し、児童の発達段階を考慮した教育活動に改める。
	ふれあい月間の取組や生活指導上の情報共有を通して、未然防止、早期発見・対応に努める。	4	4	ふれあい月間の取組、生活指導の記録の常設と生活夕会での活用など、新しい取組を実施し、情報の共有化や早期発見・対応ができている。研修や分担の整理を行い、未然防止への改善を図る。	4	4			年3回のふれあい(いじめ防止強化)月間の取組について、関係する分掌の教員が計画的に関わり、研修や取組の充実を図るとともに、保護者や地域の方へ工夫して周知する。
健康教育	栽培活動や給食指導など体験的な学習を実施する。	4	4	各学年の栽培活動や給食指導については、計画に則り、実施できている。ねらいをさらに明確にし、全体の計画を見直し、総合的な学習の時間や他教科とのカリキュラムマネジメントにつながる振り返りをしていく。	4	4		体力調査結果を踏まえ、投げる力の育成など、CSの取組も活用しながら、重点的に取り組む機会をもつてほしい。	栽培活動や食育に関する学習が充実していることを活かしつつ、体育・健康教育に含まれる取組として捉え、系統性や内容を見直す。また、体力調査結果を踏まえた体育科指導の他、年度当初にも取り組める運動を検討する。
業務改善	各種通知やアンケートにスクールメールを活用することを徹底する。家庭との情報共有にフォームや会議システム等オンラインを活用する。	4	4	通知のデジタル化により、手紙の印刷・配布による効率化が図れている。出欠状況やアンケートのデジタル化により、集約等の時短が図れている。7月の保護者会を参集とオンラインのハイブリッドで実施できた。	4	4		学習面だけではなく、連携についても学校全体としてICTの利活用が進んでいる。今後も保護者・児童への情報共有の工夫に努めてもらいたい。	通知やアンケート、欠席連絡のデジタル化、保護者会のハイブリッド化が図られ、電話連絡や集計作業等が改善されたことから、引き続きデジタル化を推進する。
	会議の精選や校務支援システムの活用を徹底し、児童と向き合う時間を確保する。	4	4	校務支援システムの活用が2年目となり、慣れてきたことにより時短が進みつつある。引き続き、活用していく。	4	4			児童指導上必要な打合せや会議の時間を確保するために、放課後ではなく日中に会議設定を行う。